

## はしがき

本書の目的は、エジプトにおけるスィーサー体制の形成過程とその統治の特徴を明らかにすることである。

エジプトでは、2013年7月に軍によってムルシー大統領が排除され（「6月30日革命」）、2011年「1月25日革命」以降で2度目の政治移行期が始まった。移行プロセスは、当初の計画より遅れたものの、改正憲法の制定（2014年1月）、大統領選挙（2014年5月）、議会選挙（2015年11～12月）と進み、2015年12月に完了した。

第2移行期（2013年7月～2015年12月）の開始から約1年間は、当時の軍トップだったアブドゥルファッターフ・スィーサーによって暫定大統領に任命されたアドリー・マンスール最高憲法裁判所長官（当時）が政権を担った。しかし、その背後で移行プロセスを実質的に管理していたのは軍だった。その後、2014年5月に実施された大統領選挙では、出馬のために軍籍を離れたスィーサーが圧勝し、翌6月にスィーサー政権が誕生した。つまり、第2移行期は、軍の意向に基づく統治体制が構築された時期と理解することができる。その中心にいたのはスィーサーだった。そこで、本書では第2移行期全体をスィーサー体制の形成期と捉え、その形成過程を多角的な視点から明らかにする。

本書は、アジア経済研究所で2014～2015年度に実施した研究会の成果の一部である。すでにアジア経済研究所のウェブサイト（<http://www.ide.go.jp/>）に掲載されている論考もあるが、それら既出の論考も含めて改めて一冊の書籍として編纂したのは、スィーサー体制の形成過程とその特徴を総合的に提示するためである。

すでに第2移行期の完了から2年が過ぎた。ましてや2014年6月に就任したスィーサー大統領の任期は残り半年となり、次の大統領選挙が近づいている。現在のエジプトは、「アラブの春」後の動揺を乗り切り、その統治体制は再び均衡（安定）に達したようにも見える。

そのような状況のなかで、均衡に向かう過程であるスィーサー体制の形成期について今更取りまとめたのは、それが現在のエジプトの統治形態を理解するうえで有用な視座を提供すると考えたからである。本書は、新たな事実や資料を掘り起こしたものではない。したがって、新情報という点では、本書が新鮮味に欠けることは否めない。しかし、多角的な視点からスィーサー体制の形成過程を跡付けることで、「1月25日革命」を経てエジプトの統治体制はどう変わったのか、また現体制は持続可能なのかを考える手がかりを提示できたのではないかと考えている。本書が「アラブの春」後のエジプトを理解するための一助になれば幸いである。

2017年12月 編者